

政権交代を骨抜きにしてきた組織力

―社会保障・税一体改革の経過から見えたこと

荒 又 重 雄

取れる。また、第一部の部分も、多彩な現行分野での課題が細かに列挙されており、内部での今後の綱引きを予想させている。これに方向を与える第一部第一章「社会保障改革の基本的考え方」では、子育て、若年者の雇用環境を重視しつつ、「世間の公平の見地から」と高齢者福祉への牽制も書き込まれている。

「はじめに」に戻るが、そこには「財政健全化」および「経済成長」との関連が書き込まれた後、最後に「素案に基づく改革への取組」として、「今年度中に税制改革法案を国会に提出する」、「本素案をもつて野党各党に社会保障・税一体改革のための協議を提案し、与野党協議を踏まえ、法案化を行う」としているのである。

この路線に従って「責任野党」に対する野田内閣の「隠忍自重」の行動があった。政権党が熱心に国民に話しかけてきたとは言えない。国民は改革の細部に惑わされて何が起りかけているのか理解できないでいる一方で、税収が上がった時には使わせてもらおうと、省庁は待機している。消費税による増収は社会保障のためのものである、と法成立にあたって首相が語っても、「原則として」そうだとされているに止まる。与野党三党の修正合意で「防災や減災などに資する分野に資金を重点的に配分する」という文言も盛り込まれている（『日本経済新聞』二〇一二年八月一日）。

「原則として」という官庁日本語は、「必要があ

◇ 政権交代の変質

政権交代が変質したと判断する理由は、「国民の生活のために」と打ち上げたマニフェストの実施の困難から、財政の見直しよりも消費税の増税に踏み込み、しかも社会保障の再建へ明確な構図のないままに消費税増税論を先行させ、挙句の総選挙では政権維持の見通しが暗くなっていることにある。

そもそも、政権交代の動因の大半は敵失だったのであり、新たに政権を担うこととなった民主党のマニフェストは、事前に十分な検討と国民からの理解を得たものではなかった。とはいえ、「ばら撒き」と批判する野党側が実は「ばら撒き」の先行者であったのだから、民主党政権は慎重に着実にマニフェストの細部を調整しつつ、あくまでもそれを目指して、現実には一歩ずつ前進すれば良かった。

しかし、事業仕分けが未だ中途なのに、消費税増税を掲げた菅・与謝野の二人三脚から、TPP

で「もしかしたら逆転ホームランかも」（大田弘子）

と期待される動きが始まり、自民党は、自分がやれなかった増税を民主党にやらせた後に、政権に復帰して予算を握るプランで「政局」を動かしてきた。

民主党は、「責任野党」自民党の意向をうかがうことで、一歩一歩と後退りを続けた。社会保障と税の一体改革は分解し、社会保障の充実は内容が曖昧のまま後回しにされ、消費税増税のみが先行している。

◇ 一体改革の後退

実は、二〇一一年六月三〇日の『社会保障・税一体改革成案』から二〇一二年一月六日の『社会保障・税一体改革素案』に移ると、早くも道は今日の状況に向かっていたことがうかがえる。

『素案』の「はじめに」は、まず「国民の共有財産である日本の社会保障制度」で始まるが、第一部「社会保障改革」よりも第二部「税制改革」の方に量質ともに重点がシフトしているのが見て

ればそれ以外もあり得る」ことを意味している。社会保障の方はと言えば、新設予定の「社会保障制度改革国民会議」に下駄を預けて、また先送りとなっている。今後の政権が消費税の増税と社会保障水準の切り下げを一体実施してしまう道が用意されているのである。

◇ 骨抜きにさせた知恵と力

沖縄核持込密約の事実上の確認や公衆面前での事業仕分け、国内の貧困率の公表など、華々しく始まった政権交代の試みは、これまでの政治責任を問うところに至る前に、曖昧のまま留め置かれ、あるいは省庁が許容できる範囲内で終わった。

そもそも、いわゆる「事業仕分け」は、財務省が我慢できる範囲内で提供した標本についてのみ、実施されたのであった。

次いで、先ず将を討てとばかりに、「金権」小沢や「宇宙人」鳩山攻撃が始まった。背後に潜む政治的悪知恵まで想像力が及ばない正直庶民の前に繰り広げられるマスメディアの情報発信を援護射撃にして、政権交代のリーダーたちの内部の様々な相違に、対立と亀裂の楔が打ち込まれた。「叩けば埃の出ない奴はいない。向こう脛の傷を蹴飛ばせ」とばかりに、当面の国民的課題からすれば枝葉末節、さほどの重要性を持たない問題を取り上げての個人攻撃で、政治的悪知恵による周

到な人選が進められた。悪知恵が見え透いていることで最たるものは、鉢呂経済産業大臣を排除した経緯である。

政権交代によって、これまでは政治や行政の重要過程からは遠ざけられていたような人材が、永田町や霞が関とその周辺に呼び寄せられたが、それらの人々の言動を「無害化」する悪知恵は、まずは奉つて権力の蜜に酔わせることであり、次いで発言させ、それを記録しながらも、日本的な官僚のレトリックによって棘を抜くことである（原英史「官僚のレトリック―霞が関改革はなぜ迷走するのか」新潮社、二〇一〇年五月）。このテクニクは、最近では、実効性のある文言は政令や条例に任せ、「基本姿勢」のみを法律とし、意味の無いような附則を徳目としてガス抜きに利用するところまで進化している。

官僚の用意に乱れがあることもあった。菅内閣が官邸に呼び寄せて開催した重要会議の議事録が無いことに、世間は驚いて注目したが、筆者はこれに驚かなかつた。というのは、日本では予定議事録は会議に先立って出来ており、ほとんど修正は要らないことになっているからである。委員の意向は集まる前から掌握され、行政に有益で無害な審議結果が事前に確認されている。国会や、それに準じた地方議会では、速記で議事録が作成されるが、質問者と答弁者が有権者の前でお互いに困らないように、事前に相談の上で演じられてい

ることさえあった。それが、政権交代と政治主導で、これまでの経験からは予想できないことが起つて、察するに担当官僚が対応できなかったけなのである。

今や政策思想としてのマニフェストの大綱は見えなくなつて、永田町での長談義に移り、様々な分野に積み重なる問題解決の道行きは、一見公平に見えるやり方で、官僚によるスタートラインの引き直しに直面している。現行制度の多様な分野での差し迫つた課題にまぎれて、政策の大綱は見えづらくなり、選挙民は政策討論から外されていつている。

東日本大震災の被災地の様子から、太平洋戦争末期の本土爆撃による焼け跡を想い出し、福島原発の事故の経緯から、日中戦争で陸軍が中国大陸奥地に侵攻し、引くに引けないでいた様を想い出す筆者は、今般の政権交代の顛末を見ていて、戦後日本におけるいくつかの大事件、例えば、2・11スト、狂乱物価と賃金爆発、スト権ストなどの顛末を想起するのである。カレル・ヴァン・ウォルフレンが『日本／権力構造の謎』（早川書房、一九九〇年）で描いていたハシシステムVとその管理者たちの姿が筆者にも見えてきた。

◇ 排除されかけた者・列伝

日本の支配層の政治的知恵と粘り強さを想い、

これと対抗する側が会得しなければならぬ知恵は何か、連合赤軍やアキバの無差別殺人のような乱心を引き寄せない理性的行動様式をいかに用意すべきかを想うとき、ハシステムVの管理者たちの手口がすでに、かなり主権者の目の前に露わになってきた現状を知ることが大切である。わがもの顔に行政指導の準則としてののみ法を扱う霞が関の中枢や、司法に憲法違反状態だと指摘されながら国会議員の選挙規定を改めようとする永田町の大勢に対して、民主主義は我が手にありと、法による支配の核心を主張することが大切である。

「国策捜査」を世に知らしめた佐藤優の戦い以来、「中枢」から排除された者たちが、社会的には生き残って意気軒昂に活動する事例が積み重なっている。以下に列挙する著作は、とりあえず筆者が手にしたものに限られるが、そのように「排除されかけた」者たちの列伝となっている。佐藤優『国家の罠―外務省のラスプーチンと呼ばれて』（新潮社、二〇〇五年三月）、東郷和彦『北方領土交渉秘録―失われた五度の機会』（新潮社文庫、二〇一一年五月）、今西憲之『週刊朝日取材班』『私は無実です―検察と闘った厚労省官僚村木厚子の445日』（朝日新聞出版、二〇一〇年九月）、大坪弘道『拘留百二十日―特捜部長はなぜ逮捕されたか』（文芸春秋、二〇一一年一月）、佐藤栄久『知事抹殺―つくられた福島県汚職事件』（平凡社、二〇〇九年九月）、高橋洋一『財務省が隠

す650兆円の国民資産』（講談社、二〇一一年一月）、古賀茂明『日本中枢の崩壊』（講談社、二〇一一年五月）、副島隆彦・植草一秀・高橋博彦『国家は「有罪（えんざい）」をこうして創る―植草事件』裁判記録』（祥伝社、二〇一二年七月）、森ゆうこ『検察の罠―小沢一郎抹殺計画の真相』（日本文芸社、二〇一二年五月）。

このうち東郷氏の著作について特記すると、身を退くように「担当者」から迫られた東郷氏がこれを拒むと、「なるほど、東郷さんは、切腹ではなくて、打ち首を望んでおられるのですね」と返されたところ（四二―四四頁）。このようなことが二一世紀の日本にあるのかと驚嘆させられる。オランダの政治学者カレル・ヴァン・ウォルフレンは、『人間を幸福にしない日本というシステム』（毎日新聞社、一九九四年一月）の中で「官僚たちが強力な政治家たちに脅威を感じはじめたら、検察が面倒をみるのだ。田中角栄にこれが起り、金丸信にも起きた。小沢一郎やほかの改革派政治家たちにも同じことが起きるかも知れない」と述べていた。今となれば、ほとんど予言していたと言っべきであろう。

◇ 民主主義の深化を

ポピュリズムへの警戒が必要である。民衆の方へ顔を向けて人気をとり、真の識者の意見を蔑ろ

にするのがポピュリズムであるかに言われることがあるが、そうではない。枝葉末節のことで華々しく花火を打ち上げ、人々がそちらに気を取られている隙に、人目を避けて人を差し替え、重要文書に加筆削除をかけて、あとは「粛々と」進むというハシステムVのやり方がポピュリズムなのである。ペーシック・インカム制度の道を拓いたかに思わせて、消費税の逆進性に目くらましをかけ、かつは育児や教育への支出を普遍的給付の形に切り替えようとするマニフェストの政策思想を解体するのが、ポピュリズムを利用するハシステムVの側の知恵なのである。

これに対し、政権交代に賭けた側は、霞が関や永田町の一角に食い入った者たちと、生活の地元で日々を暮らす者たちの間で、敏速で高度に知的な情報交流を創り出さなくてはならない。

かつて太平洋戦争のとき、当時の識者はアメリカと戦っても勝てないことを知っていたが、神国不滅を信じ込ませてしまった国民の手前、引くに引けなかった、と証言した者もいる。ポピュリズムを克服することは、社会全体の課題である。

△あらまた しげお・社団法人北海道労働文化協会会長▽